

ケニアの動物保護政策

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

アフリカ 54 ヶ国の中でも、とりわけ自然と野生動植物が保全されているケニアですが、国をあげての保護政策のお陰だといっても、過言ではありません。

ケニアの独立運動の指導者として、旧宗主国だった英国と闘い、自由を勝ち取った初代大統領のジョモ・ケニヤッタは、元来動物好きとして知られていました。

立派な象牙を持つ野生のゾウを国獣として保護(24 時間交代で動物監視員に見張られ、天寿を全うしたオスの巨象アーメッドがそれで、片方の牙の重さが67kgもあり、長さが約 3m、地面に届くほどのオスゾウ)したり、世界的なフラミンゴの生息地として有名なナクル湖の近くに大統領の別荘を建て、週末をしばしば過ごすなど、とりわけ自然環境と野生生物に深い関係を寄せた大統領でした。

さらに 1976 年には、他のアフリカの国々に先がけて野生動物の狩猟と販売の禁止を、法律で定めました。この法律ではすべての野生動物の毛皮、爪、牙、骨など一切が対象になっており、もちろん象牙も含まれました。

1976 年 7 月 23 日以降、ケニアの狩人(ハ

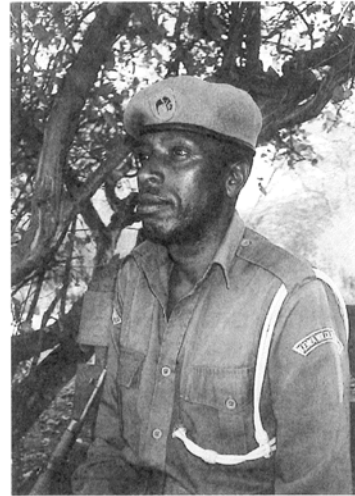


写真1 ベレー帽に制服、銃を持つ動物監視員(ハンター)たちは野生動物を撃つと密猟者と写真1ベレー帽に制服、銃を持つ動物監視員して処罰されることになったのです。

1 年余りの猶予期間ののち、ケニアじゅうの土産物店の店先からは、象牙をはじめライオンやチーター、ヒョウの毛皮、その他野生動物の製品は一切姿を消し、外国から訪れる狩猟を目的にした観光客を案内していたプロハンター達は、失業してしまいました。

ケニアでは野生生物観光省(ミニストリー・オブ・ツーリズム・アンド・ワイルドラ



写真2 国立公園の入口で入園の手続きをする

イフ)という役所が、国内各地にある国立公園や動物保護区を管理・保護していましたが、1990年、新たにケニア野生生物公社(ケニア・ワイルドライフ・サービス=KWS)が設立されました。KWSは野生生物観光省の仕事を引き継ぎ、野生生物保護を中心に密猟者を取り締まるためのバトロールなどの任務についています。

KWSのロゴは、親子ゾウが2頭仲良く並んでいる姿。そしてKWSの職員(レンジャーと呼ばれる野生動物監視員)の制服は、カーキ色のベレー帽にカーキ色の上下。ベレー帽には、KWSのロゴの親子ゾウのバッジが輝やいています。

レンジャーには銃の携帯が許されており、密猟者は発見し次第、問答無用で射殺しても良い、という権限まで与えられています。

ケニアでは1946年に最初の国立公園が制定されて以来、55の国立公園や保護区があります。その総面積は国土全体の7.7%にあたります。

東アフリカの表玄関、ケニアの首都ナイロビにあるジョモ・ケニヤッタ国際空港のすぐ近くに、ナイロビ国立公園があります。

ナイロビ国立公園は1946年に制定された、ケニアで最も古い公園です。

公園の面積は117平方キロメートルですが、公園内には丘あり、谷あり、泉あり、森ありと、変化に富んでいます。ここにはライオン、ヒョウ、スイギュウ、クロサイ、チーター、キリン、シマウマをはじめ、おもな動物はほとんど暮らしていますが、ゾウだけはいません。

訪問者は公園内の数ヶ所でのみ車から降りることが許可されており、原則として野生動物の観察と撮影は車の中から、というルールがあります。

ナイロビ国立公園に限らず、ケニア国内の公園や保護区では、入園の際に必ず手続きをし、入園料を支払わねばなりません。

非居住者(ノンレジデンス)は1人27アメリカドルですから、約3,400円相当になります。この収入が、野生動物保護のために役立てられており、観光客の増加が、ケニアのためにプラスになるのです。つまり我々日本人も含まれます。

ナイロビ国立公園は人口200万人の首都ナイロビの中心から、わずか10キロメートルしか離れていないため、方向によっては公園内の野生動物の背景に、高層ビル群が見えますが、これはまさに人間と野生動物の共存の象徴です。

余談ながら、“野生の王国”ケニアには、野生動物を一度も見たことのない人たちが大勢います。子どもたちが学校単位でナイロビ国立公園の正門近くにある「動物孤児園」の檻の中にいる動物を見学したり、「野生生物保護教育センター」で講義や映画を見て勉強するくらいです。